

世界平和教授アカデミー編

国際化時代と日本 再訂版

10年後の国家目標

書評集

目次

韓国での感想	1
日本有識者の感想	4
改訂版への序	7
本書を推薦します	10

善本社

東京都千代田区
神田神保町1-62

韓国での感想

世界の先駆者の任務を遂行

— 軍国主義を脱皮した
健全な保守主義の提唱 —

明知大学大学院教授

慎道晟

この本は日本の平和教授アカデミーが三年間に二千名に達する学者、専門家を動員して進行了共同研究の成果を集大成したものだ。その規模の膨大さと、驚くべきは「10年後の国家目標」というこの本の副題が意味するごとく、それは相当に長期的な展望から日本という国の進路を提示してみようと努力した意欲的な作業の成果といえよう。

本の内容は第一部総論と第二部個別戦略の展開に大きく分けられている。第一部の第一章は序論的に国家目標研究の背景と

必要性、研究体系等を説明している。続いて本論に入り、第二章は「長期ビジョンの設定」という題下に、これから来る二十一世紀は、文明的及び政治、経済的に「太平洋時代」が到来すると見、それを東西文明の融合による新文明の創造期であると規定している。そしてこのような時代に処する日本の指標として、彼ら自身の文化・伝統に根づいた国際化と開放化を主張している。

第三章は今後十年間の日本の生存戦略として日本の繁栄と幸福は何よりも世界平和の維持にかかっているという前提の下に、軍備拡張に代わる効果的な総合安全保障策を確立することを強調している。そうして一九八〇年代の国際環境を概観し、これに対応する日本の主体的条件として彼らの国民性の様々な長点とあわせて「国際感覚の欠如」を最大の短点として掲げながら、軍事力のない日本が生き残るためには、経済力と技術力その他の「マンパワー」を最大限に活用せねばならないという「国家目標」を提示している。

第二部は「個別戦略の展開」であるが、それは国際化時代に適応する政治と外交、日本の総合安全保障策、共存のための経

濟政策、世界平和のための科学・技術政策、國際化時代においての教育と文化、マスコミへの提言等の多くの章に分かれ、具體的提案をし、終わりにこのような国家目標達成のための各界への要請と國民的合意形成の必要性に答える教授アカデミーの使命をあきらかにすることによってしめくくりをしている。このように広範囲にわたる提案をひとつひとつ紹介することはできないので、この本の基本性格を現わしているいくつかの題目に關してのみ簡単な論評を加えることにする。

この本を一貫する基本精神はひと言でいって健全な保守主義ということができる。保守主義であるためにそれは目立って國家主義的であり、また徹底して反共的である。ところで私たち韓國國民は日本の國家主義といえはすぐ第二次大戰前に私たちを苦しめた日本軍國主義を連想して生理的な拒否反応を起こしやすい。しかしこの本に現われた保守主義は過去のそのような軍國主義や排他的な國粹主義を脱皮する努力をみせており、彼らの文化伝統の良い面だけでなくその偏狹性を率直に認定し、日本社會の國際化、開放化を積極主張している。そのような意味で、これは健全な「新保守主義」ということができるのである。

例を挙げると、この本は共產主義の脅威、特にソ連の膨張政策に備えるために日本が現在の消極的な防衛態勢を脱け出て適切な國防力を保有することを主張しながらも、日本の國際的な責任は、やはり軍事的なことよりも、經濟的技術的な面にあることをくりかえし強調している。また戦後日本の驚異的な經濟成長が彼らの國民性の誠実、勤勉さと家族主義的社會伝統に基づくものであることを誇りながらも、日本の對外援助政策の利

己主義的性格に対しては辛辣な批判を加えている。

しかし哲學的な意味でもっとも問題となるのは「ヒューマニズム」に對する態度だ。この本は総合安保政策を論ずる題目で、現在日本國民を支配している「敗北主義」の根源が「ヒューマニズム」にあるとし、「ヒューマニズム」は戦後米國から入ってきたもので、そのもっとも大きな欠陥は、人間を單純な生物として扱い、犠牲奉公という日本古來の価値觀を否定することだといっている。

すなわちここでは「ヒューマニズム」を個人主義・物質主義・享樂主義の同意語として使用しているが、これは「ヒューマニズム」のもっとも卑俗な側面だ。日本人がこのように「ヒューマニズム」を卑俗化された形態として受容するようになったのは、彼らの文化伝統の中に正しい「ヒューマニズム」の伝統がなかったためで、同時に現下の日本社會の度の過ぎた無秩序な道德的混亂がこの部分の執筆者をして「ヒューマニズム」に對するこのような偏見を懷かせるようになったのではないだろうか。

しかしこの本の他の部分、すなわち第二部第三章の「共存のための經濟政策」では「人間のための新經濟理念」の確立を高唱しながら官利至上主義の産業經濟を、愛情に基づく人間關係によつて修正することを提案している。また第五章の新しい教育理念を論じた題目では、「ヒューマニズム」が西欧で新鮮な生命をもつて輝く近代文化を創り出し、日本でもそれが日本人をして權威に押さえつけられた旧時代をのがれて、自由で平等な空氣を導入してくれた功績を認めながら、しかし「エゴ」

（○○）による腐敗、墮落の欠点を指摘して「ヒューマニズム」の「限定的受容」を提唱している。

このように論旨に若干の不統一・一性が目につくのは、この本を多くの人が分担執筆したせいもあるけれども、基本的にはこの研究自体がまだ新しい指導理念の模索段階にあるためではないかと思う。事実、「民族・国家・階級等の対立を超越した世界主義理念の確立」はそんなに簡単なことではない。この本で論者たちが日本的なもの（この場合には東洋的なもの）というのが良いかも（しれない）と西洋的なもの、個体的なもの（と人類的なもの、現在のなものと未来的なものとの間をゆれ動いているもの）のためである。

どうあろうと、すべての対立と差別を超えたひとつの絶対価値探究の必要性を感じるようになったというだけでも、真に大変な収穫である。歴史はまさにそのような時期に到達し、それはすべての国、すべての国民にとともに要請されることで、日本の教授アカデミーが先駆者の任務を遂行しているのである。これは高く評価されねばならないことであり、我が韓国でもそのような作業が迅速になされればと切に思うものである。

韓国問題の解決に大いなる助け

世界平和教授協議会会長

李 恒 寧

日本の世界平和教授アカデミーの会員二千余名の共同研究結

果で出版された「国際化時代と日本」という本は、日本の学界の非常な関心をひいているし、政界からもこの本に関して多くの議論が行われているという。

日本が終戦を迎えた後、日本の民主化に関して多くの研究がなされたが、日本の長期的な国家目標を設定して、これを政治的、外交的、経済的、教育的、文化的な多方面にわたって多くの学者たちが、学際的な共同研究を行った本は、あまり多くなかったという。

さて、今度日本の世界平和教授アカデミーが、この難儀で膨大な研究業績をあげたのは、その学問的な価値において、または政策的な価値において、日本国家に大いなる貢献をなしたとみられる。この本が今度韓国語に翻訳されたが、これが我が国においてもいろいろと多くの参考になると思う。

この本の目的は、変化無双な世界情勢と、特に西洋文明の没落という世界的激動期において、どのように日本が生き残るかという戦略を模索することにある。

この本は、東西文明を調和した新しい文明の出現を渴望しながら、科学的なものととも哲学的なものにも多くの力点をおいている。日本がかかえている文明史的な苦悩は、その日本とまったく近い隣国であり、また、永い間同じ東洋文化圏で生きてきた韓国においても、同じ苦悩なるゆえに、この問題解決のための日本の諸学者たちの多角的な見解は、我が韓国問題の解決においても、大いなる助けとなるに違いない。

特に今度の韓国版において、日本の松下正寿会長は、環境のおかげで悲劇を経っていないゆえに日本人は、融合においては天

才であるが独創には未熟なのに比べて、歴史的悲劇をたびたび経た韓国人は、創造と飛躍においてすぐれているといったけれど、この言葉は、韓国人にずいぶん鼓舞的だと思う。韓国のような歴史の悲劇の中でも、もっとも大きな悲劇といえる南北分断の逆境を経ながら、もっとも深い悲しみをなめている韓国人にとっては、韓国が生き、東洋が生き、世界が生き得る新しい文明を創造する使命があたえられていると考えるのだが、このような新しい文明創造において、隣国の日本学者たちの幅ひろく、深みのある共同研究は、どのくらい貴重な資料であるかを切実に感じさせる。

この本が、我が言葉で翻訳されることに對して喜びを禁じえないと同時に、この本が我が韓国人にひろく読まれることを願うてやまない。

ダイナミックで一読を薦める力著

元韓国学術院長

李 丙 焄

戦後における日本は今こそ大いに反省自覚すべきときであると思う。何よりも植民地時代の悪夢を明らかに清算して、それこそ共存共栄の大抱負を抱いて（国際的に）お互いに助け合わねばなるまいと思う。

この際において、日本の世界平和教授アカデミーの会長松下正寿博士等の大著『国際化時代と日本』を拝読して実に感銘を

深くした。目下世界各国は対内・対外的にすこぶる複雑な関係に絡み合っており、その目標をどう定めるべきかに苦心している。

この大著の巻末に付しているもろもろな統計的データを見れば、著者がいかに広く深く学び調べられたかを感じることができ。ことに日本の目的展開図をつけて一目瞭然とその進むべき路程を示している。すべてがダイナミックで、一読をすすめる力著たることを信じて疑わないのである。

日本有識者の感想

難問中の難問に挑戦

——一九八〇年代生き残りの道——

（財）政策科学研究所理事長

笠井章弘

激動が予想される一九八〇年代に、日本が生き残るにはどうしたらよいか？ この課題に答えることは極めて難しい。難問中の難問といっても過言ではない。しかし、誰かが、そして誰もが答えなければならぬ課題でもある。この課題に挑戦した、世界平和教授アカデミーの勇氣と努力に先ず敬意を表したい。

本書の問題意識は、「次の八十年代は日本の戦後歴史の転換

期であり、われわれは精神と物質の調和した新しい文明の創造に向かつて第一歩を踏み出すべき時期である。ここにわれわれは日本のビジョン、国の目標を持つことの必要を痛感するものである」という点に要約される。つまり、国家目標の設定という視点から八〇年代の難問解決のアプローチをおこなおうとするところに本書の特徴が存在する。

第一部第一章では、ナショナル・ゴール研究の背景として、本研究の必然性、特徴と研究体系の構想を示す。第二章では長期ビジョンの設定として、文明史から見た二十一世紀の展望と日本の文化・伝統に根ざす国家目標とは何かを分析する。

第三章は本書のハイライトで、今後十年間の日本の生き残り戦略を展開している。ここでは、現代日本が要請されている中心課題として、真の教育改革、国防理念の確立、生き残り戦略の確立をあげ、国家目標の基本として、国家の独立、国民の生存と繁栄、国家の存立意義とは何か、を問う。そして次に、日本をめぐる国際環境の変化と現代社会の病理を分析する。次に国家目標設定のための国内の主体的条件を検討し、最後に総合戦略を展開する。

長期の国家目標としては、「太平洋国家」をあげ、カタストロフィーへの対処と主体性ある国家の回復の重要性を指摘する。日本の生き残り戦略として、軍事力なき日本の生き残る道は、「経済力とか技術力、伝統的な価値観を背景として、積極的に平和のリーダーシップをとっていくしかない」という。そしてその意味から「世界平和の戦略」を展開する。この平和戦略を、「個別戦略」と「長期戦略」とにわけてその目標と戦略

を示す。すなわち、「個別戦略」としては、第一に、変動する国際情勢に即応しうる政治と行政の機構の確立。第二に、国際安全保障費というユニークな発想の視点からの、世界の共存共栄のための諸政策の積極的遂行。第三に、上記課題解決のための意欲と能力を持つ国民を養成するためのマスコミと教育への要請。

「長期戦略」としては、前述の二十一世紀の太平洋時代へ向けての戦略であり、「今後十年間の日本の生き残り戦略」である。ここでは、自由圏先進国間の先進国病への課題をはじめ、南北問題、共產主義諸国の課題がとりあげられている。

第二部は個別戦略の展開で、第一章は国際化時代に適応する政治と外交、第二章は日本の総合安全保障政策、第三章は共存のための経済政策、第四章は世界平和のための科学技術開発、第五章は国際化時代における教育と文化、第六章マスコミへの提言、第七章ナショナル・ゴール達成の要請、にわけて問題の分析と提言をおこなっている。

何分三千人を超える参加者と三年余を費やした膨大な研究成果なので、簡単に紹介することは難しい。本書をこのような形でまとめられた人々の努力にまず感謝を述べたい。

そして、次に若干の感想と希望を述べさせて頂きたい。

第一は、第四次中東戦争が、石油ショック、そしてこれを契機として起こった世界政治経済構造の変動——それは東京サミットにみられるごとく現在までつづいている問題——の世界史の意味の検討がやや薄かったのではないか、という点。いいかえれば、一九八〇年代の最大の課題の一つがエネルギー問題であ

り、その対応の仕方によつては、二十一世紀の世界の、そして日本のあり方が大きく変わるのではないかと思われるからである。

第二は、国家目標の設定を国民の合意によつて可能にする方法の分析である。特に、この国民的合意形成へのアプローチは、この研究の今後の課題としては是非おこなつて欲しい課題であると考ええる。

文明史的観点に立つた

国家総合戦略を展開

世界経済調査会理事長

木内 信胤

一九七七年と七八年の二年間、わが国は「出超に悩む」といふ意外な事態に陥つた。これは、明治以来百十年に及んで取り続けてきた「輸出拡大」といふ「国家目標」を過剰達成したといふことで、現在の日本の一つの象徴的な事件である。それはまた、わが国が明治以来続けてきた「西洋文明の吸収」といふ仕事を成功裡に完了したことを意味する。

他方、最近の世界情勢は、西洋文明の行きづまりを思はせるものがあつて、我々は、これから戦後三十年取り続けて来た一方的な対米依存の姿勢から脱却して、東西両文明を融合した新しい文明に立つて二十一世紀に主導的役割を果たすべく、自ら

期待するところあつていいのである。

「世界平和教授アカデミー」は、この度二千名もの学者の参加の下に、三年間の歳月を費して「ナショナル・ゴールの研究」をまとめ上げた。その成果が本書である。これは、七四二頁の膨大なものであるが、長い間、等閑に伏されてきた安全保障と教育といふ二つの問題を中核において、政治、経済、技術、文化を含めた国家的総合戦略を展開してゐる。

論旨は明快である。文明史的見地から、来たるべき太平洋時代に於ける二つのカストロファイ（自由圏の衰退、共産国家の台頭）を前提し、それに対処するため、日本は自らの持てる経済力、技術力、およびマンパワーを世界平和のために投入することが、今後十年間の日本の生き残り戦略である、とする。そして、二十一世紀に日本が世界平和の主導的役割を果たすためには、あらゆる面にわたる国際化を急務だとして、六つの章に分け国際化のあり方を考察してゐる。

本書の研究が学者グループによつて成されたことにもよるのであるが、新しい時代の改革の主体としては青年層を考へ、高等教育の場をその突破口として捉へてゐる。

かうして、本書は「歴史を創造する主体」としての立場から、大胆な行動への指針を提示してゐるのであつて、賛否はいづれともあれ、各種の不可欠の観点を明示してゐることは注目に値する。

平和の幻想に警告

参議院議員

堀江 正 夫

日本を廻る世界情勢は、ますます厳しさを加えております。

賢明な一部の国民は、この事態を正しく理解し、深慮されておられますが、政府等の事態認識の甘さもあって、大部分の国民はなお、平和の幻想の中に情眼をむさばっているのが、残念ながら今日の日本の実態であります。このような情勢下、本書が發刊される意義は、誠に大きいものと存じ、皆様に熱読をお勧めする次第です。

機宜を得た企て

(社)日本郷友連盟会長

杉 田 一 次

凡そ、国家の安全保障は、国家指導者達が先憂後楽の気概で将来を洞察し、先手先手と国策を進め、かつよい教育が行われることによって初めて期し得るものである。古今東西、国家興亡の歴史は、その日暮しや腐敗墮落した政治やエゴ中心、気概のない社会には将来性のないことを教えている。

昨年来、ソ連はわが国固有の北方領土に軍事基地を増強し、

今またサミット会談に対応するかのように、空母ミンスクを極東水域に派遣してきた。日本を廻るアジア情勢は、この一二年間に隔世の変化を示し、イラン革命、ソ越同盟の成立、ベトナムのカンボジア侵攻、中越戦争、大量華僑の国外追放等、太平洋戦争前に劣らない様相が現出されつつある。特に、内外より鼎の軽重を問われんとしつつある昨今である。

かかる秋、国家の将来を憂え、斯界の権威者達が集まり、十年後の国家目標を目指す『国際化時代と日本』を著し、善本社より出版せられることになった。誠に機宜を得た企てであり、正に必読の書といえよう。

改訂版への序

世界平和教授アカデミー会長

松 下 正 寿

『国際化時代と日本——10年後の国家目標——』の初版が売り切れたので改訂版を出すわけであるが、これはもちろん、新しい出版ではない。それは、これで一応完成されたものである。

われわれが、この本の初版の原稿を書いたときの予測は、その後続々と適中しているが、残念なことには、今後も続いて適中していくと思う。「残念なことには」と言ったのは、われわれは予測の適中しないことを切に望んでいたし、これから適中しないことを望んでいるからである。われわれは戦争を厭わ

しく思い、恐れ、平和を願う。故に、われわれの神経は繊細である。繊細であるから、恐ろしい動きに対し敏感である。われわれのその敏感な神経に、時代の恐ろしい動きがひしひしと迫ってくる。ちょうど暴風があり、その兆しを身を感じつつ、何とかして他にそれてくれないかという空頼みの感も強かった。

残念なことに、そしてまことに不幸なことに、われわれの不吉な予測は悉く適中した。カーター氏は、アフガニスタン事件で対ソ認識が一変したそうである。われわれは、カーター氏の率直さを評価すると同時に、米国大統領の認識があの程度で良いものか疑問に思う。また、イラン革命は、当時もっと簡単に治まると思われていたが、案に相違して悪化し、米国との関係は少しも改善されていない。わが国もその巻き添えを食って、エネルギー問題に悩まされている。韓国趨勢についても、事態は流動的であって、われわれの認識を誤ると、事は重大である。国内の問題についても、大平内閣への不信任決議案の成立、解散、選挙という一連の動きが、ハプニングかそれとも計算されたものか。それはわれわれには分からない。しかし、いずれにしてもカタストロフィーであることには間違いない。そのうえ、ダブル選挙の真っ最中に、内閣総理大臣の大平さんが死去した。事態は、安定に向かうよりは流動に向かう公算が大きい。ということとは、大動乱の兆しが濃いということである。

ただ、初版が書かれた頃と今との大きな相違は、あの当時には、米ソの軍事力の逆転がまだ十分に国民に認識されていなかったことである。今日では、その逆転、すなわちソ連軍事力の圧倒的強さは、国民の間に広く認識されている。であるから、

危険の原因は国民の側にあるのではなく、政治家の側にある。国民というのは、日本人一般の総称であって、国家のことを考えることに専従している特殊な存在ではない。国民は、決して国のことに無関心なのではない。多に関心はあるが、日常の生計を営むことに忙殺されているから、どうしても消極的にならざるを得ない。国のことを積極的に考え、どうしても良いのかを立案するのは、国のことに専従する者、すなわち政治家である。しかし、政治家がどんな立派な考えを持ち、それを実行する力を持っても、選挙で落選しては何にもならない。政治家に対し実行不可能なことを要求しても何にもならない。われわれは、学者、知識人、マスコミから、しばしば「立派な」言説を耳にする。しかし、その大部分は単なる理想論、きれいごとであって、現実に政治に従事している人には役に立たない。しかし、現状のままでは極めて危険である。この矛盾をどうして解決するか。『国際化時代と日本——10年後の国家目標——』は、この矛盾に直面し、政治家が政治家としての地位を失わず、選挙に成功しつつ、国民を正しく指導するにはどうしたらいいかの理論を提供した。われわれは国を憂える者であるが、国を憂える者は必ず切腹しなくてはならないとは考えていない。われわれは国を憂え、国のために殉ずることの尊さを十分に知っている者であるが、同時に、そういうような悲劇に陥らずに、救国の道を発見する英知を学ばべきであると信ずる。要するに、われわれの根本的立場は、汚職か、さもなくば切腹かというような二者択一ではなく、常に実際の第三の道を発見しようとする立場である。

換言すれば、われわれの立場は理論的・学究的であると共に、戦略論であり、行動の指針である。われわれの具体的政策は、他の「政策屋」さんのやり方とは根本的に違う。政策屋さんには、政策作戦のプロであるから、要領よく政策案を作りあげ、一見実際的である。しかし、根本的なものが欠けている。一言にしてつくすと哲学が無いのである。政策提言に、哲学とか思想は不必要である、と思う人もいるらしいが、はなはだし間違ひである。政策は、人を動かそうとする試みである。そして、人は理性に従うとともに、理性を超越した存在である。したがって、やや合理的に計算し得るのは経済活動だけであるが、その経済活動すら一種の抽象であって、實在の人間は、合理的なものとともに不合理な、あるいは超合理的要素によって動かされる。その当然の結果として、政策屋さんの作った政策は、カタストロフィーに堪えない。

カタストロフィーは例外的事件であるから、通常の場合には役立つのではないかという反論も予想される。事實はそうではないのである。歴史は、程度の差はあるが、一切がカタストロフィーの連続である。故に、歴史は「科学的」には把握できない。「科学的」に把握できる面は、常識的に、または事務的処理できる面であって、特に「科学的」にやってもらわなくてもいいのである。歴史の把握は哲学的にやらなくてはいけない。「哲学的」と言っても、別にカントがどうか、ヘーゲルがどうか言わなくてはならない、という意味ではない。われわれがここでいう「哲学的」とは、大局的とか「大乗的」とかいいう意味であって、アカデミズムにおける、いわゆる「哲学」とは

関係がない。もっと具体的に表現すると、われわれは政策提言に関心を持っているのであるから、具体的になくてはならないと確信しているが、具体的であるためには、個々の現実にとらわれてはだめなのであって、個々の現実の背後に存在する實在を把握しなくてはならない。

ところで、この實在とは何か。それはもはや、「科学」の問題でも実証主義の問題でもなくなる。實在は宇宙それ自体かも知れない。神という名称が適しているのかも知れない。われわれはその名称にはこだわらない。その實在の働きは、実に不思議である。しかし、「清い心」はそれを認識し得る。そして、この「清い心」によって直観的に認識されたものは、実証主義的方法によって認識されたものよりは、はるかに正確である。この意味においても、われわれは新しい政策研究のあり方として歴史に残る金字塔を立てたと自負している。

われわれの他事はこれで完成したのではない。われわれは、これから続々と本書を基礎とし、本書の延長として仕事を行い、国の内外に訴えるつもりである。具体的にどんなことを考えているかというと、日本は八〇年代に何を為すべきかということの研究し、その研究に基づいた政策を提出したいと思っているのである。われわれの考えている具体的政策提言は、次の二つに分けられる。第一は、経済・エネルギー問題を含めての総合安全保障であり、第二は、教科書問題を中心とした教育問題である。

総合安全保障とは、国の安全保障のことであるから、総合的でなくてはならないのは当然のことである。したがって、特に

「総合」という形容詞を冠するのは屋上屋のきらいがないでもない。しかし、今日においてもなお安全保障を専ら軍事に局限して考える人が案外多く、そこに多くの混乱を生じていることを考えると、やはり多少の不正確さを忍び、「総合安全保障」という名称を用いることにした。安全保障を軍事に局限することとは困ったことであるが、ちょうどその反対に、「総合」という形容詞を利用し、安全保障には軍事的要素が不必要であるような錯覚が生じて困る。ただし、この点については、本書の防衛哲学の部分において詳細に論じられているから、ここではくりかえさない。

教育問題は、質的には文化の問題である。しかし、わが国の場合、国の安全保障と密接に関係している。ところで、文部省は政治家を文部大臣とする役所であるから、教育問題は必然的に政治的であり、従って、政治が教育を支配することになる。故に、教科書選定の権限は、直接に生徒児童に接し、彼らを指導している教師に与えられるべきである、と彼らは主張する。

元来、文部省という所は昔から不人気なところであるから、文部省から権限を奪って「我が敬愛する先生」に与えよ、という話になると、それに賛成し付和雷同する者が多いのは当然である。しかし、一皮むいて見ると、この主張は教科書選定権を文部省から日教組に移せという主張にはかならない。幸いにし、現在のところ日教組は教科書選定権を持っていない。しかし、実際問題として日教組の教科書に及ぼしている影響は甚大である。

われわれは、一つ一つここに実例をあげて立証する紙面が無

いから省くが、日教組影響下にあるわが国の教科書における反国家主義には驚くべきものがある。われわれをして率直に言わしむれば、初等・中等教育において、これほどはなほだしい反国家教育を強制している割合に、生徒、児童の思想が健全であることに驚くのである。しかし、この誤れる教育から日本国家を崩壊させる思想は早晚生れるであろう。そして、その時期は相当に迫っていると思う。

故に、われわれは一方において日教組に挑戦し、日教組の教科書選定に対する影響力の除去に努力すると共に、真に信頼するに足る教科書のモデルを作成したいと思っている。それは容易ならぬ大事業である。しかし、憂うべき現状と将来の日本を考え、そしてまた、自由主義陣営における日本の重要な責任を痛感する時、この大事業は必ず実行しなくてはならない、とわれわれは考えている。

(昭和五十五年十月三日)

本書を推薦します

シカゴ大学教授 M・カプラン

国家目標の設定というものは、個人や会議において策定できるものではない。実践的な調査と総合的、体系的な研究によってはじめて可能となる。この意味において、本書は画期的な研究成果である。

日本は明治以来、欧米先進国に追いつくことを目標にしてきたか、その目標を達成した今日、次に何を為すべきかは重要な課題である。日本の国際的責任が問われている中で、本書が出た意味は大きい。

筑波大学客員教授 A・ヘイ

二十一世紀を見通し、八〇年代にとう対処するかは、単に統計資料を分析しただけでは出来ない。本書は歴史、文化、伝統をもふまえた学際的な政策研究である。勇気ある学者たちによるこの報告書は、明日の日本に確たる指標を与えるであろう。

ノウル大学教授 張基瑾

アノアの諸国は日本の指導的役割に大きな期待をかけてる。本書は新しい民族倫理を追求する画期的な国家目標の研究である。

外交評論家、在米那須聖

最近の世界情勢を見ると、日本はここ二、三年内に第二次大戦以来の世界的な大動乱に巻き込まれようとしている。このような時期に本書が出たことは非常に喜ばしい。

日本生産性本部会長 郷司 告平

私か主な仕事としております生産性運動も、石油ショック以前は物質的な側面が主眼だったのですか、これからはそれはいけないということて、やはり三年前に学際的な委員会をつくり新時代の生産性について研究しています。我々の前途は混沌の時代といわれていますか、これを切り開く一つの指針がこのナショナル・コール研究であることは間違いありません。二〇〇〇人の学者が学際的に協力して完成したというこの本を精読して生産性運動の大きな指針にしたいと考えております。

三井不動産株会長 江戸 英雄

本書は、二千名にも及ぶ国内外の学者による研究成果であり、そこには激動の八〇年代に向かうとする日本と世界に対する憂国の心情が滲み出ている。

神戸市立外国語大学教授 笠原 正明

目標を喪失し、混乱したわが国社会の再建について、これ程理令と政策を明確にした書籍は存在しない。多くの人々か本書を読み、たとえ個々の分野において思考を異にしようとも、わが国の進路について共に語り合う基盤が形成されはと願つてやまない。

*創造的大学人たちの出会い、

筑波大学のビジョン

最新刊

福田信之編著

四六判上製・定価2,300円

昭和40年代、学園紛争のさなか、数々の大学改革案が出された中で、筑波大学の新構想は多くの人ひとの心を引きつけ、奇蹟的な成功をみるこゝたてきた。それは、戦後日本の高等教育史上、画期的な出来事であった。本書は筑波大学創立に執念を燃やした著者をはじめ、大学・文部省・政界関係者らの、語られることのなかった生の声を収録。さらに、現在のユニークな筑波大学教授陣と各界の有識者か、未来へのビジョンと期待を語り合った。

21世紀へのビジョン

福田信之著

四六判・定価1,800円

戦後日本の言論界の虚妄を正し、二十一世紀に向けての実質的な論議を提唱する筆者が日本の将来について幅広く論じた、迫真の評論・座談集。

国際化時代と大学

福田信之著

A5判・定価2,000円

国際化の荒波にもまれる日本の舵取りをどうするか。理学者の枠を出て、大学問題・科学技術政策・エネルギー問題を論じた著者初の評論集。

世界平和教授アカデミーとは

一九七〇年代の前半以来、わが国を取り巻く国際情勢は急激に変動し、すてに、経済・政治・社会・言論などの変化は、時代が急速に転換しつつあることを告げている。これは、いわゆる「戦後」の構造が最終的に崩壊し、新しい時代を迎えていることを意味しているとともに、同時にまた、大きく見れば近代以来築き上げられてきた現代文明の大きな転機であるとも考えられる。いすれにせよ、私たちは「ものの見方・考え方」の根本的な転換を要請されていると言えるだろう。

ところか、大学をはじめ教育界やマスコミ界など一般に社会の指導的立場にある分野では、かえって、この非常に重要な時代的転換期に即応しきれていない面が目につく。私たちは、このような現状に対して、責任と使命を感じるとともに、単なる個人的努力を越えた知識人同志の強い連帯が必要だと考える。

時に、学問の専門化の弊害が指摘されている今日、時代の要請にこえるには、各専門分野の研究者が互いに協力しあって、総合的な視点から、学際的に問題解決にあたることがある。

こうした認識の下に、世界平和教授アカデミーは、文明的危機における東西文明超克への国際的アプローチ、内外の政治的課題への学際的アプローチを指すリベラルな学術団体として、国際会議や共同研究・シンポジウムなどによる多彩な研究活動を行っている。